

# 応援傾向尺度の開発

～応援行動及び共感性・性格特性との関連についての考察～

## Development of the Cheering Tendency Scale

～A Study of the Relationship among Cheering Behavior, Empathy, and Personality Traits～

島田 真希<sup>†</sup>, 東 美由紀<sup>†</sup>, 嶋田 総太郎<sup>†</sup>

Masaki Shimada, Miyuki Azuma, Sotaro Shimada

<sup>†</sup> 明治大学

Meiji University

ce221038@meiji.ac.jp

### 概要

応援に関する心理尺度については、特定の応援対象がいる人についての尺度は存在するが、幅広い層を対象とした尺度はまだない。そこで本研究では、他者を応援する傾向性の個人差を計測する「応援傾向尺度」を作成した。調査の結果、「好ましい人への関心」、「ネガティブな状況の打開」、「周囲との同調」、「ポジティブな状況の推進」の4因子で構成され、十分な信頼性と妥当性があることが示された。さらに、クラスタ分析の結果から、4つのクラスタが得られた。

キーワード：応援, 心理尺度, 因子分析

### 1. 背景

我々人間は、日々の生活の中で、スポーツの自国代表を応援したり、好きなアイドルを応援したりするなど、誰かを応援することがよくある。しかしながら、応援がどのような心理的メカニズムに支えられているかはまだ明らかにされていない。応援は支援と類似した概念であるが、その差異について、永井 (2014) は、応援とは「対象との一体化、自他の区別がなくなるようなしかたで、たすけることをさす」ものであり、「支援」とはちがう、別の構えをもった寄り添いかたであると言及している[1]。また、応援を引き起こす要因の一つとして共感が考えられる。手嶋 (2017) は、「対象への愛情や憧憬といった共感的心情と、自分本位の考えを退けようとする利他的/非利己的態度を伴った行為」と特徴づけている[2]。応援に関する心理尺度については、小城(2004)のファン心理尺度など、特定の応援対象がある人についての尺度は存在するが、応援対象がいない人を含めた心理を検討するような尺度はまだない[3]。そこで本研究では、特定の応援対象のない人も含めた幅広い層を対象として、他者を応援する傾向性の個人差を計測する「応援傾向尺度」を作成した。さらに、クラスタ分析を行い、応援傾向に着目した分類が可能かについても検討した。

### 2. 予備調査

予備調査では、応援する傾向性の個人差を測定する項目を作成し、因子構造の検討と信頼性の分析を行った。尺度の項目を作成するために、応援したいと思うような人や状況について考え、以下の6つの心理的要素を想定し、それらに関連する質問項目を作成した。

「ネガティブな状況の打開」は、状況が不利な方を応援したくなるアンダードック効果を想定した。「ポジティブな状況の推進」は、応援対象がポジティブな状況を慢心せずに推進している状況を想定した。「内集団」は、応援対象が自分と同じ集団に属している状況を想定した。「社会的望ましさ」は、応援対象が一般的に見て社会的に好ましい特徴を持っている状況を想定した。「周囲との同調」は、周りの人が応援することを楽しんでいるような状況を想定した。「個人的好み」は、応援対象が一般的に見て好ましいと思われるような特徴を持っている状況を想定した。

対象者は大学生及び大学院生 301 名 (男性 94 名、女性 207 名、21.49±1.30 歳) であった。応援傾向尺度 33 項目に対して、探索的因子分析を行った (最尤法、プロマックス回転)。なお、項目の削除基準として、因子負荷量 .40 未満の項目と多重負荷のある項目および KMO の標本妥当の測度が .70 未満を設定し、それを下回る項目を 1 項目ずつ除外し分析を繰り返したところ、最終的に 5 因子解 23 項目が示唆された。最終的な項目の内容から、第 1 因子は社会的信頼、第 2 因子はポジティブな状況の推進、第 3 因子は好ましい人への関心、第 4 因子は周囲との同調、第 5 因子はネガティブな状況の打開、と命名した。尺度の信頼性の検討のため、クロンバックの  $\alpha$  係数を算出したところ、いずれの因子も高い内的整合性が得られた。

表 1 本調査の探索的因子分析の結果（最尤法、プロマックス回転）

	1	2	3	4	
<b>因子1：好ましい人への関心 (<math>\alpha = .89</math>)</b>					
素晴らしい人柄の人がいれば、あなたはその人を応援したいと思いますか？	.95				
あなたにとって好ましい性格の人がいれば、あなたはその人の活動が上手くいって欲しいと思いますか？	.88				
あなたを楽しませてくれるような人がいれば、あなたはその人を応援したいと思いますか？	.60				
立場が弱い人にも気を使える人がいれば、あなたはその人を応援したいと思いますか？	.57				
あなたにとって尊敬できる要素を持つ人がいれば、あなたはその人に頑張って欲しいと思いますか？	.55				
<b>因子2：周囲との同調 (<math>\alpha = .84</math>)</b>					
自分の興味の有無に関わらず、周囲で話題になっている人がいれば、あなたも一緒になってその人を応援したいと思いますか？		.82			
ある人に対して、周りの人が熱狂的に応援していたら、あなたも一緒になってその人を応援したいと思いますか？		.82			
ある人に対して、周りの人が応援することを楽しんでいけば、あなたも一緒になってその人を応援したいと思いますか？		.75			
ある人に対して、あなたと同じような価値観を持っている人が支持していれば、あなたも一緒になってその人を支持したいと思いますか？		.54			
あなたの大切な人（家族や親友、恋人など）が支持している人がいれば、あなたも一緒になってその人を支持したいと思いますか？		.51			
<b>因子3：ネガティブな状況の打開 (<math>\alpha = .80</math>)</b>					
なかなか結果が伴わない人がいれば、あなたはその人を応援したいと思いますか？			.62		
不利な状況に置かれている人がいれば、あなたはその人に頑張って欲しいと思いますか？			.62		
圧倒的な力量の差がある相手に挑もうとしている人がいる時、あなたはその人の成功を願いたいですか？			.62		
容姿もしくは体格にすぐれていない人が、自分の長所を磨いている時、あなたはその人を応援したいと思いますか？			.53		
<b>因子4：ポジティブな状況の推進 (<math>\alpha = .85</math>)</b>					
夢を叶えて嬉しそうにしている人が、より高い目標を掲げている時、あなたはその人の活躍を願いたいですか？				.87	
良い成績を出して喜んでいる人が、今後も良い成績を出そうと努力している時、あなたはその人に頑張って欲しいと思いますか？				.78	
いつも幸せそうにしている人が、嬉しそうに活動していたら、あなたはその人の活躍を願いたいですか？				.48	
	累積寄与率	.19	.35	.48	.59
	寄与率	.20	.15	.13	.11
	累積寄与率	.19	.35	.48	.59

### 3. 本調査

本調査では、予備調査とは別の回答者のデータを用いて探索的因子分析及び確認的因子分析を行い、因子妥当性を検討した。また、日本語版対人反応性指標 (IRI-J)、情動的共感性尺度を行い、構成概念妥当性を検討した。さらに、実際の応援行動に関するアンケートおよび日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) を実施し、完成した尺度との関連を検討した。また、クラスタ分析によって類型化を行い、それぞれのクラスタの特徴についても検討した。

対象者は、大学生及び大学院生 464 名 (男性 195 名、女性 269 名、 $21.46 \pm 1.90$  歳) であった。予備調査で絞った項目について、再度探索的因子分析を行ったところ、最終的に 4 因子解 17 項目が示唆された (表 1)。

最終的な項目の内容から、第 1 因子は好ましい人への関心、第 2 因子は周囲との同調、第 3 因子はネガティブな状況の打開、第 4 因子はポジティブな状況の推進、と命名した。尺度の信頼性の検討のため、クロンバックの  $\alpha$  係数を算出したところ、いずれの因子も高い内的整合性が得られた。

確認的因子分析 (最尤法) を実施した結果、適合度指標は、 $\chi^2(17) = 334.66$ ,  $p < .001$ , CFI = .95, GFI = .92, RMSEA = .07, SRMR = .05 で許容範囲内、もしくは良好な値が得られたため、作成した応援傾向尺の因子妥当性が示された。また、IRI-J の「共感的関心」、情動的共感性尺度の「感情的暖かさ」について有意な正の相関がみられた。さらに、応援行動、性格特性の一つである「協調性」との間でも正の相関がみられた。応援傾向尺度の各下位尺度の得点を用いて、階層的クラスタ分析 (Ward. D2 法・ユークリッド距離) を実施した結果、4 つのクラスタが得られた (図 1~4)。

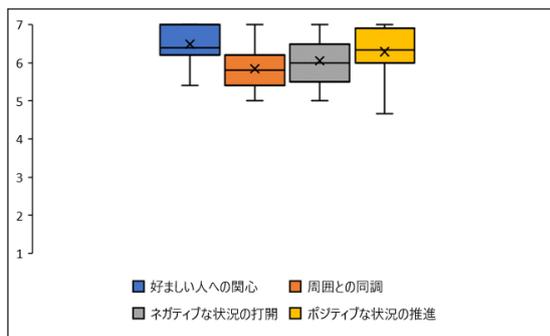


図 1 第1クラスタ (積極的応援群)

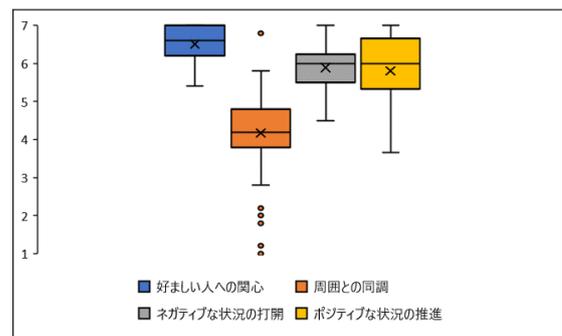


図 2 第2クラスタ (自己充足的応援群)

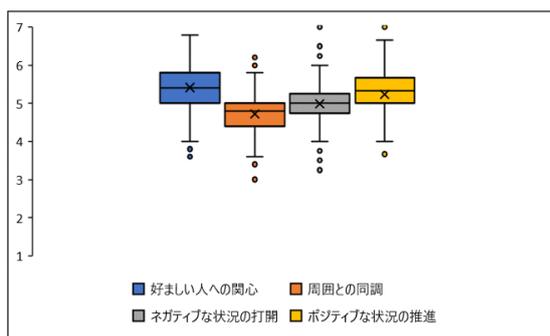


図 3 第3クラスタ (受動的応援群)

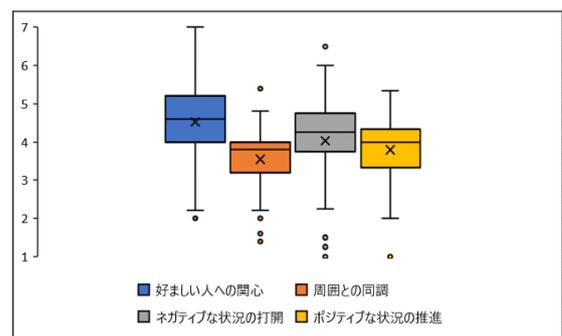


図 4 第4クラスタ (消極的応援群)

第 1 クラスタは全体的に得点が他のクラスタに比べて高いので、あらゆる対象に応援したいという気持ちをもつ「積極的応援群」、第 2 クラスタは「好ましい人への関心」の得点が他のクラスタよりも高く、「周囲との同調」が低いので、周囲の話題性等とは関係なく、自

分が好きなのを応援したいという気持ちをもつ「自己充足的応援群」、第 3 クラスタは「周囲との同調」の得点が他のクラスタと比べて 2 番目に高いので、能動的・自発的というよりは、周囲に影響を受けて応援したい気持ちになりやすい「受動的応援群」、第 4 クラス

タは全体的に得点が高ラスタに比べて低いので、応援そのものに関心があまりない「消極的応援群」とした。

## 4. 考察

### 4.1 応援傾向尺度の作成

本研究では、他者を応援する傾向性の個人差を計測する心理尺度を開発した。アンケート調査の結果、「好ましい人への関心」、「ネガティブな状況の打開」、「周囲との同調」、「ポジティブな状況の推進」の4因子で構成され、十分な信頼性と妥当性があることが示された。尺度作成時に想定していた応援に関わる心理的要素の「社会的望ましさ」と「個人的好み」は「好ましい人への関心」に該当した。また、予備調査で得られた社会的信頼因子は、一般的に見ても好ましい性格や人柄を持っていると捉えることもできるため、同様な心理的要素の「好ましい人への関心」と合わさったと考えられる。

### 4.2 構成概念妥当性の検討

葉山ら(2008)の先行研究では、感情の共有と、応援と類似した他者志向的反応との関連性が示唆されている[4]。本研究の結果からも、ポジティブもしくはネガティブな状況にある他者について応援したいという因子が抽出されたことから、応援には情動的共感が関連する可能性が考えられる。先行研究より、社会的に好ましい人に対しては、情動的共感が認知的共感によってモジュレーションが起こることが示唆されている[5]。したがって、「好ましい人への関心」因子もそれに類似したものである可能性がある。「周囲との同調」因子が抽出されたことは、応援対象だけでなく、周囲の人への共感も応援したいという気持ちを引き起こすことを示唆している。

### 4.3 応援傾向尺度と応援行動及び性格特性の関係

作成した尺度と実際の応援行動に正の相関が認められたことから、応援したいという気持ちが生じると、実際の応援行動につながることを示された。また、性格特性の一つである「協調性」との間でも正の相関がみられた。「協調性」をもつ人は他者への愛着心が強いいため[6]、応援したい気持ちが生じやすいのだと考えられる。

### 4.4 今後の展望

本研究では、特定の応援対象を持たない人を含めた幅広い層の人たちの応援スタイルを特定できる尺度を

作成することができた。今後は、大学生を対象として作成した本調査の応援傾向尺度を元に、他の年齢層との因子構造の比較や、対象が集団である場合、応援対象の状況の変化が応援に及ぼす影響等について調査することが考えられる。また、本調査で作成した尺度の各下位尺度に該当するような状況での応援と、脳活動との関連を調べることも検討している。

## 文献

- [1] 永井良和, (2014) 文化現象としての「支援」: 人助けは誰のためのものか. 井上俊(編) 現代文化を学ぶ人のために 全訂新版 世界思想社, pp. 226-239.
- [2] 手嶋英貴, (2007) “<応援>の文化史”, ポピュラーカルチャー研究, Vol. 1, No. 3, pp. 4-19.
- [3] 小城英子, (2004) “ファン心理の構造(1)ファン心理とファン行動の分類”, 関西大学大学院『人間科学』社会学・心理学研究, Vol. 61, pp. 191-205.
- [4] 葉山大地, 植村みゆき, 萩原俊彦, 大内晶子, 及川千都子, 鈴木高志, 倉住友恵, 櫻井茂男, (2008) “共感性プロセス尺度作成の試み”, 筑波大学心理学研究, No. 36, pp. 47-56.
- [5] 嶋田総太郎, (2014) “共感・他者理解におけるミラーシテムと情動・報酬系の活動変化”, 心理学評論, Vol. 57, No. 1, pp. 155-168.
- [6] 小塩真司, 阿部晋吾, カトローニピノ, (2012) “日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み”, パーソナリティ研究, Vol. 21, No. 1, pp. 40-52